漢字のうた【師範代養成コース　三段】

1

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも

わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば情もしのに古思ほゆ

（『万葉集』所収の和歌～短歌と同じリズムの歌～）

2

天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き

駿河なる　布士の高嶺を　天の原　振り放け見れば

渡る日の　影も隠らひ　照る月の　光も見えず

白雲も　い行きはばかり　時じくそ　雪は降りける

語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ　不尽の高嶺は

（『万葉集』所収の長歌）

天地が分かれたときから、神々しくて貴い駿河の富士の高嶺は、太陽の光を隠し、月の光を遮り、白雲も行き滞り、常に雪が降っている。いつの世までも次々に語り伝えていこう、富士のことは。

3

故人西のかた黄鶴楼を辞し　※「故人」は、古くからの友人のこと。
煙花三月揚州に下る
孤帆の遠影碧空に尽き
唯だ見る長江の天際に流るるを

（李白『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』）

4

国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火三月に連なり　※「烽火」は、のろし、「三月」は、三か月のこと。
家書万金に抵たる　※「家書」は、家族からの手紙のこと。
白頭掻けば更に短く
渾べて簪に勝へざらんと欲す　※「簪」は、かんざしのこと。

（杜甫『春望』）

戦火のため、国都、長安は破壊されてしまったが、山河は昔のままである。城壁に囲まれた街にも春が訪れ、草木が青々と茂っている。時世のひどさを思うと悲しくなり、花を見ているだけで涙が出る。家族と離れて暮らす我が身を思うと、鳥の鳴き声にさえ不安を覚える。戦いののろしは三か月にも及んでいる。それゆえ、家族からの手紙は何物にも代えがたい。白髪頭は、かけばかくほど短くなり、とうとうかんざしもさせないほどになってしまった。